

大学図書館の役割

(経済化と情報化への対応)

2011.11.28.

総合政策学部
中野幸紀

知識(常識)は公共財

- P.Romerの1991年の「内発的技術変化」という論文で、研究開発成果が一般社会にコピーされ、自由に利用される(技術情報の非競合性)ことで社会全体の技術水準が向上すると述べた。
- 学校で教わる一般知識(常識)には、誰でもアクセス可能(非排他性)で、誰でも利用可能(非競合性)であるという「公共財」としての性質が備わっている。
- 図で示すと次のとおりとなる。

経済化の波への対応

- 経済化とは何か？
- 自給自足(市場に出さない生産物)
- 余剰生産物の市場での販売
- 販売可能なものを商品と言う
- では、商品とはなにか
- サミュエルソンによれば、排他性と競合性を併せ持つ財(サービスを含む)のこと
- 現代経済は「商品による商品の生産」が主流
- プレーヤーは私的利益追求を社会から許された「企業」という経済主体
- 図書館は経済主体となれるか？

情報化への対応

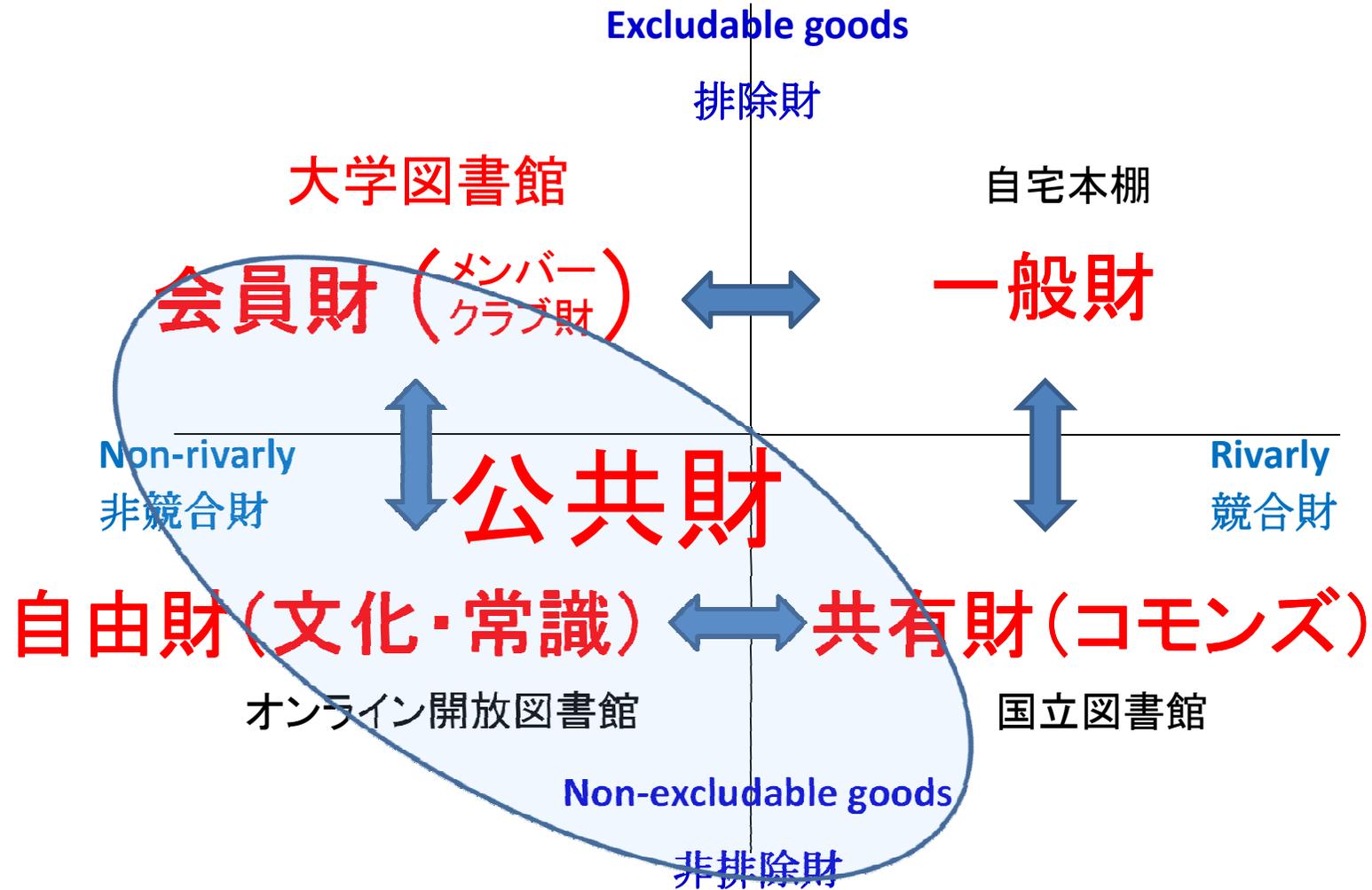
- 情報化の本質は2点
 - (1) コピー(複製)が無限に可能
 - (2) 流通限界コストがほぼゼロ

この結果、在庫は不要、中間取引形態も不要となる。いわゆる流通革命。中抜き。

消費者が直接生産者から購入可能。

生産者が直接コンテンツを生産し、全世界にばらまく。ビジネスとして成立するかどうかは「広告」などの隣接事業の問題となった。

経済財の性質分類



ここに示す分類は「相対的な」ものであり、厳密ではない。

図書には競合性がある

- 常識には競合性がないと考えられるが、物体として触れることができる (tangible) 知識財には「競合性」が生じる。
- 経済産業省が印刷出版産業を所管しているのは、紙の生産・配分がなければ図書の出版が不可能となるからである。
- これまでの知識・情報は、紙、プラスチックなどの「媒体 (メディア)」に書き込まれて初めて拡散 (伝播 (diffuse)) が可能だった。
- 紙媒体はその保管のために多くのスペースを必要とするため、本屋、図書館の大型化が進展した。

図書はコモンズ財である

- 図書には競合性があっても、排他性はない。
- よって、コモンズ財であると言える。
- コモンズ財には、多数の消費者がわれがちにアクセスすると消尽してしまうという性質がある。
- そのため、アクセスを制限するために「管理者」が必要となる。
- この管理者の一つの「形態」が図書館である。

図書館図書には排他性がある

- 図書の管理者に許され、図書館に入館できる人々は「特権」を有すると考えられた(アルベルト・マンゲル、野中邦子訳、図書館 愛書家の楽園、白水社、2008)。
- とすれば、図書館図書は「排他性」を有する財だと考えることができる。
- 物としての図書にはすでに競合性があったので、排他性が付け加えられた図書館図書はすでに「経済財」となっている。

大学図書館の図書は経済財か？

- 大学図書館は、その図書館の運営管理母体となっている大学に入学しなければ利用できない。
- したがって、大学図書館はメンバーシップの必要な「会員財」として図書利用サービスを提供している。
- 図書にはtangibleな物財として「消滅する」という競合性があり、図書館にはメンバーシップを持たなければアクセスできないという排他性がある。であれば、これはもはや公共財ではなく、「経済財」であると考えられる。
- よって、「本屋」、「貸本屋」などと同様のビジネスが可能である。
- しかし、大学図書館だけでなく、地域図書館なども「ビジネス」はやっていない。
- なぜだろう？

危機に直面する図書館の文化性

- 図書館は、以上検討してきたとおり、ほっておくと「経済化」の波に押し流されてしまう。
- では、人類の文化を形成し、人々の常識を支えるという図書館の社会的役割、つまりは「公共性」、を維持していくためには何を検討しておかなければならないか？

(1) 利用者の範囲をどこまでに限定するか？

すでに見てきたように、利用者を限定しなければ公共財としての性質が高まる。
利用者を教職員・学生だけに限定すればクラブ財としての性質が高まる。

(2) 利用者負担をどこまで求めるか？

クラブ財はメンバーシップを有する人々がそのすべての負担を負う。しかし、公共性を高めて行けば、利用者だけでなく社会全体で税金による負担を行うという形態になる(道路と同じ)。

現代図書館の役割

- 現代社会は1991年のソ連崩壊によって、希少財の分配を「市場」における経済的(金銭的)な自由競争によって行うことが、社会全体の効率(少ない資源で最大のアウトプットを得る)を高めるという考えに立っている。
- こうした経済優先の考え方が広く受け入れられるようになってきている。
- したがって、「図書館の公共性(文化性)」というメッセージを、常に前面に押し立てて「声高に」言い立てておかないと、次の「情報化」の波と同様に、経済化の波にあっという間に飲み込まれてしまうほど「図書館の公共性(文化性)」と言う価値はもろい」ものだと考えられる。

図書館の電子情報化(1)

- 図書館がオンラインで提供される技術が出現した。電子書籍、オンラインジャーナルなど。
- これらの媒体は、紙、プラスチックなどと異なり触れることができない媒体(non-tangible goods)である。
- そのため、競合性は相対的に小さい。いくらでもコピー配信可能だからである。
- 配信に必要な「限界コスト」は出版に比較すると何十万分の一以下であろう。

学会における議論

- 学会誌は紙媒体のひとつである「雑誌」として学会メンバーに提供されていた。
- この場合は、排他性と競合性の両方を満たす経済財だったと考えられる。
- しかし、いくらでも配信数を無制限に増やすことができるオンライン配信の出現で、競合性も排他性もともに失われた(はず)。
- だとすれば、学会論文はその本来の「一般知識」を増大するための「公共財」として無料で誰にでもアクセスできるよう開放すべきだとの議論が出てくる。
- しかし、一方で、学界メンバーの排他的利益を守るべきだとの議論もある。
- 排他的利益を守るためにはオンラインジャーナルに課金するための管理システムが必要となってくる。
- 紙媒体の学会誌に加えてオンラインジャーナル管理会社(企業)に利用料金を追加的に支払うかどうかについて学会では議論が繰り返されている。

図書館の電子情報化(2)

- 自炊がおおはやりである。
- 紙媒体だった本、雑誌などをスキャナーで読み取り、デジタル電子書籍として蓄積することが自炊。
- これで、まず、「場所をとらなくなる」。どこにでも、電子書籍(自炊本)の持ち運びが簡単にできるようになる。
- したがって、図書館のスペース確保問題に大きな議論を投げかけている。
- すでに、米国、日本とも著作権の切れている古文書から電子化する国民的作業が開始されている。
- とすれば、大学図書館はそうした電子化されたデジタル・アーカイブスに「フリーライド」するだけでいいのだろうか？

土地利用の費用便益分析

- 上が原の土地は経済価値が三田よりも高い。
- だとすれば、大学図書館のスペースに置かれている図書そのものの「経済価値」は上が原の図書の方が三田の図書よりも大きい。
- 上が原に所蔵するための土地利用コストが高い分だけそれを利用する際の消費者の「効用(満足度)」も大きいと考えられる。
- 上が原の図書を三田に移行すればそれだけコストは下がるが消費者の便益も下がる。

情報化、電子化の費用便益分析

- 情報化、電子化によって消費者のアクセス経路が複数になることは消費者の便益を増大する。
- 情報化、電子化は限界コストがほぼゼロだから、消費者に無償でいつでも提供が可能(なはず)である。
- すでに文部省などの助成金を得て実施している電子アーカイブ化は図書館サービスの高度化であると同時にコストをかけない消費者便益の増大であると考えられる。
- よって、情報化、電子化は図書館の「代替サービス」ではなく、「補完サービス」である。

いくつかの具体的提案

- 大学図書館は、電子化・情報化によってその消費者利便性を高めるべきである。
- そのためには、これまでどおり、窓口業務のオンライン化を推進するなど「取引コスト」を引き下げる努力を継続すると同時に、窓口業務だけでなく、図書の閲覧という「本来業務」についてもみなおすべきであろう。
- 具体的には、大型モニターを多数設置し、電子化された論文、古典などを自由に閲覧できるようにすべきであろう。
- その場合、国などが無償で提供する電子書籍を利用すべきであろう。
- また、電子化(PDF化)の終わった図書は、三田などの相対的にコストの安い場所にアーカイブスとして保存すべきであろう。
- 図書館スペースを本来の「文化・教養(常識)」の再生産場所に戻すためには、「マルチメディア化」、「飲食物の持ち込み緩和」、「読書スペースの個室化」なども検討に値すると思うのだが.....

参考文献

- Paul A. Samuelson, The Pure Theory of Public Expenditures, Review of Economics and Statistics, Vol. XXXVI, No. 4, 1954
- Paul A. Samuelson, Diagrammatic Exposition of a Theory of Public Expenditure, Review of Economics and Statistics, Vol. XXXVII, No. 4, 1955
- Claude Lévi-Strauss, La pensée sauvage, Pocket Agora, numéro 2, 1990
- Paul Romer, Endogenous Technological Change, NATIONAL BUREAU OF ECONOMIC RESEARCH, Working Paper No. 3210, 1991
- アルベルト・マンゲル、野中邦子訳、図書館 愛書家の楽園、白水社、2008
- Claude Lévi-Strauss, Tristes tropiques, Terre Humaine Poche 3009, 2009